

## 簿記 3 級仕訳問題 第 7 回

問. 次の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は、次の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。

現 金	当 座 預 金	受 取 手 形	売 掛 金	未 収 入 金	
仮 払 金	従 業 員 貸 付 金	前 払 金	立 替 金	備 品	
支 払 手 形	買 掛 金	仮 受 金	前 受 金	貸 倒 引 当 金	
減 価 償 却 累 計 額	現 金 過 不 足	預 り 金	資 本 金	売 上	
仕 入	給 料	租 税 公 課	減 価 償 却 費	通 信 費	
手 形 売 却 損	雑 益	雑 損	固 定 資 産 売 却 益	固 定 資 産 税 売 却 損	

1. 期中において、現金の実際有高が帳簿残高より ¥10,000 不足していたため、現金過不足勘定で処理していた。決算に際し再調査をしたところ、通信費の計上漏れ ¥7,000 と期中に概算旅費として支出した ¥10,000 のうち ¥8,000 は旅費交通費で正しく処理されていたが、出張社員から返金された ¥2,000 の現金は未処理のまま仮払金の残高として残っていた。その他誤差金額については不明なので、雑益又は雑損に振り替える。
2. 期首に備品（取得価額 ¥250,000、減価償却累計額 ¥135,000）を新潟商店に ¥100,000 の掛けで売却した。固定資産の記帳方法は直接法を採用している。
3. 従業員の給与総額 ¥300,000 から、かねて立替払いしていた従業員の生命保険料 ¥50,000、所得税の源泉徴収税額 ¥3,000、社会保険料の従業員負担分 ¥30,000、市民税 ¥5,000 を差し引いて当座預金より支払った。
4. 販売用の商品 ¥100,000 を注文し、内金 ¥10,000 を当座預金より支払った。
5. 得意先栃木商店から売掛金 ¥400,000 を回収し、うち ¥150,000 を小切手で受け取りただちに当座預金とした。残額については、東京商店振出しの約束手形を栃木商店から裏書譲渡して受け取っている。

簿記 3 級仕訳問題 第 7 回 答案用紙

	借方科目	金額	貸方科目	金額
1				
2				
3				
4				
5				

簿記3級仕訳問題 第7回 解答・解説

	借方科目	金額	貸方科目	金額
1	通信費	7,000	現金過不足	10,000
	雑損	5,000	仮払金	2,000
2	未収入金	100,000	備品	115,000
	固定資産売却損	15,000		
3	給料	300,000	当座預金	212,000
			立替金	50,000
			預り金	38,000
4	前払金	10,000	当座預金	10,000
5	当座預金	150,000	売掛金	400,000
	受取手形	250,000		

1. 問題文の読み取りに苦労する不親切な問題。本試験でこのような問題が出題されたら焦らないで後回しにしよう。本問は、期中に支出していた概算旅費の一部のみ計上されており、回収された現金については未処理だったという過去に例のない日本語の理解力が試される問題でもある。現金が回収されているのに帳簿は未処理だと実際現金は多くなり、通信費の計上漏れのように現金が支出されているのに帳簿は未処理だと実際現金は少なくなる。期中の誤差¥10,000の原因は下記の通りである。

過不足△¥10,000 = +旅費回収現金¥2,000 △通信費計上漏れ¥7,000 △不明¥??

不明分は差額で求めて¥5,000と判明し、雑損勘定へ振り替える。

2. 期首に売却されているので減価償却については考慮する必要はないが、直接法で記帳されているので仕訳には注意したい。なお、備品の売買は通常の営業取引ではないので売掛金ではなく未収入金勘定を使用する。
3. 従業員個人の生命保険料などを立替払いしているのは実務でもよくある事例の一つ。この場合は立替金（従業員立替金）勘定を使用する。所得税を徴収して従業員の代わりに納付する預り金の処理と混同しないようにしましょう。
4. 第6回仕訳問題の4と逆の立場の仕訳になります。商品を仕入れる際に手付金を支払う側は前払金勘定で処理し、取引内容が確定していない場合に用いる仮払金勘定で処理しないよう留意しましょう。
4. 裏書手形の取引はこのように複合仕訳で出題されることが想定されるが、比較的安易な仕訳になることが多く、しっかりと得点源に結びつけて欲しいところである。